【p 88～p 93】ここは山田錦のふるさと ―藤川禎次―

1 資料活用にあたって

- 長文のため事前に読ませておく。
- 88ページ～89ページまでは、由紀が酒米に興味をもつ様子について教師が要点を説明し、90ページから発問構成する進め方もある。

2 資料の読み方のポイント

- 変化するのは：由紀（子どもが「由紀」になって考えられるように発問を工夫する。）
- 変化するきっかけ（助言）は：おじいちゃんから聞く藤川禎次さんの話
- 変化するところは：「夕日に照らされてあかね色に輝いている山田錦が、藤川さんの思いを語りかけているようで、じっとまどの外を見つめていました。」

3 読み物資料の素材について

【参考文献等】

- ・ 「郷土百人の先覚者」、編集 兵庫県教育委員会、発行 財兵庫県社会文化協会、1967年
- ・ 「人と風土が育てた日本一の酒米『山田錦物語』」、編集 兵庫県酒米研究グループ、発行 神戸新聞総合出版センター、2010年
- ・ 「藤川禎次―その生涯と背景―」、藤川永生、2004
※非売品。加東市滝野図書館に5冊の蔵書あり（貸出可）

【訪れたい場所】

- ・ 「山田錦の館」
三木市吉川町吉安 222 TEL：0794-76-2401

○ 山田錦と藤川禎次について

- ・ この資料でとりあげている酒米の山田錦は、誕生から70年以上経た現在でも、国内で生産される酒米の中で、生産量トップを維持し続けている品種である。
- ・ 山田錦の誕生に大きな貢献をしたのが、藤川禎次氏である。氏は、1967年、兵庫県政百年事業により「郷土百人の先覚者」の一人に選定され、兵庫県教育委員会が編集し、財兵庫県社会文化協会が同年に発行した「郷土百人の先覚者」という本に、酒米の王者「山田錦」普及の功労者として紹介されている。
- ・ 藤川禎次氏を父にもつ藤川永生氏が執筆・発行した「藤川禎次―その生涯と背景―」のあとがきには、「藤川禎次は没してすでに五十余年になるが、そのライフワークであった酒米山田錦の普及・育成についても生存中は報われることが少なかったようである。また、幼時に肉親と死別したことに始まり、晩年も太平洋戦争によってわが国が壊滅的な被害を受けるという未曾有の難局と逆風にさらされるなど、その生涯はけっして順当とはいえなかった。―中略―人の人生はその人の志、境遇、時代、歴史が深くかかわっており、まさに百人百様である。生きてゆく限り、ふりかかる逆境や試練を避けて通ることはできない。それを乗り越えてゆく生き様が多く、多くの教訓と強い感動をもたらす。雑学の一助になれば幸いである。」と記されている。

4 展開の具体例

ここは山田錦のふるさと —藤川禎次—

- ・ **主 題 名** ・ふるさとのために C (16)
- ・ **資料の概要** ・社会科の学習で、山田錦について調べた由紀は、その開発に力を注いだ藤川禎次の存在を知り、祖父に詳しく話を聞かせてもらう。地域の農家の人たちのために品種開発の研究にねばり強く取り組んだ藤川さんの思いを知った由紀は、山田錦とともに藤川さんを「地域の自慢」と感じるようになる。
- ・ **ね ら い** ・おじいちゃんの話聞いて、夕日に照らされてあかね色にかがやいている山田錦が、藤川さんの思いを語りかけているように感じる主人公を通して、地域の人々や生活を大切にし郷土を愛する道徳的心情を育てる。

・展開の具体例

	学習活動	主な発問と予想される児童の反応
導 入	・今日の資料に興味を持つ。	副読本P89の写真(酒米を育てている田)の写真を見ましょう。
展 開	<ul style="list-style-type: none"> ・資料の範読を聞きながら黙読をする。 ・藤川さんの存在を知った時の由紀の気持ちを考える。 ・祖父から藤川さんの話を聞いた後、じつと窓の外を見つめる由紀の気持ちを考える。 ・大きくなずいた由紀の気持ちを考える。 	<p>酒米の生みの親が自分たちの地域の藤川禎次という人だと知った由紀は、どんなことを思ったのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・私たちの地域にそんな人がいたんだな。 ・藤川さんはどんな人だったのかな。 ・藤川さんはどんな気持で酒米を開発したのかな。 <p>じつと窓の外を見つめながら、由紀はどんなことを考えていたのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・私たちの町にもすごい人がいたんだな。 ・藤川さんの努力を支えたのは、地域を大切にする気持だったんだな。 <p>大きくなずきながら、由紀は続きをどのように書こうと思ったのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・なぜなら、地域の人たちのことを考え、努力した人だからです。 ・地域の自慢は、「もの」だけではありません。地域の人のため頑張ってくれた「人」も自慢です。
終 末	・感じたことを書く。	感じたことを道徳ノートに書きましょう。

自分たちの地域に日本を代表する酒米を開発した人がいたことを知った主人公が、藤川さんに興味を持ち始めていることをおさえる。

地域を愛する藤川さんの思いについてのおじいちゃんの話がきっかけとなり、郷土を愛する意識が主人公に起こっていることをおさえる。

由紀が書こうとした内容を想像することにより、ノートを前にして大きくなずいた主人公の心を考えさせ、郷土を愛する主人公の心情の高まりをおさえる。